

大学生の自立性とレジリエンスに関する研究
—レジリエンス尺度・自立性-依存性尺度・SCT・バウムテスト—

A Study of the Independence and Resilience in University Students:
Resilience Scale · Independence-Dependence Scale · SCT · Baum Test

橋本 泰子・荒木 みさこ

HASHIMOTO Taiko, ARAKI Misako

キーワード： 大学生、自立性、レジリエンス、SCT、バウムテスト

抄録

近年、景気の低迷もあり、青年の就職浪人・引きこもり・大学生のアパシーやモラトリアムそして、特に日本文化の過保護もあり、自立できない青年が問題になっている。

そこで大学生を対象に、自立と依存、家族や対人関係、将来の展望等について、調査を行った。対象は219名で、方法はレジリエンス尺度・自立－依存性尺度・SCT・バウムテストを使用した。レジリエンスの高群（30名）と低群（28名）間でテスト結果の比較を試みた。高群は自立性が高く、自己肯定感が強く、両親や友達関係も親和的で、将来や仕事に対しても肯定的である。これに対し、低群は依存性が高く、親との関係に確執があり、友達関係も希薄で、将来に対しても不安があり、挫折体験・トラウマの存在も窺われた。

これらの結果から、フリーター・引きこもりの可能性もあることから、心理的支援が必要と考察された。

目的

近年日本では景気の低迷により、失業者の増加が大きな社会問題になっている。90年代前半は2割程度であったパート・アルバイト・派遣社員・契約社員等の非正社員が、2004年度に3割を突破し、労働者全体の約35%に達し、三人に一人が非正社員になっている。また失業者の学歴は、三人に一人と一番多いのが大卒であり、ニートは高校卒が多いが、ついで五人に一人が大学卒となっている。

さらに、2009年11月の来春卒業見込みの大学生らの就職内定率の公表を見ると、前年同期比を7.4ポイント下回る62.5%となり、下落幅は96年の調査開始以来最大となった。内訳は、男子が63.3%・女子61.6%で、女子はより就職が厳しくなっている。背景には急激な経済悪化があると報告された。さらに、大卒新人で就職したとしても、3年以内で36%が退職し、10年間で3年以内に退職する人は1.5倍に増加し、2008で過半数になるとされている。

ところで、内閣府によると、ニートは85万人で、この10年間で18万人増加し、2015年には、100万人を超えるとされている。厚労省によれば、引きこもりのいる家庭は100万世帯を越えている。そればかりか、30代・4代になっても社会に出られないことが注目されている。その要因の1つとして、親が過保護のために、子供がいつまでも「甘える」といった日本独特の文化も関係していることが挙げられる（町沢，2001）。

斎藤（1998）の提言を要約すると、「引きこもりは、広い意味の社会参加が出来ない状態である。親密な人間関係が築けないというのが特徴である。これは、日本だけの特徴的な

現象であり、成人した子が家に同居していても違和感が無い社会で、文化的・社会的特徴が関係している。」このように、町沢 (2001) と共通する特徴を指摘している。

次に、青年期の心理と発達課題を概観すると、馬場 (1987) によれば、青年期は、特有の心の葛藤や動揺がある。これと戦いながら、身体変化を受け入れて男性らしさ、女性らしさを形成する。一方、親との依存的結合関係を解消していく。さらに、社会的な人間関係の中で、新しい価値観を見つけ勉学を通して職業的役割にふさわしい知識や技能を獲得して、「これが自分だ」といえる一貫性をもった自己 (自我同一性) を形成しなければならない。青年は、心理的社会的な猶予期間 (モラトリアム) に、自由な役割実験を繰り返し、やがて、現実の社会の自分に適した場所と役割を見出し、成人期に移行する。ここで「乗り越え」に失敗し、各期の発達課題の解決につまずくと、病的状態に陥ったり「遷延せる青年期」の状態を招く危険が生じてくる。主なものとして、同一化障害・引きこもり・アパシー・摂食障害等があると指摘している。

以上の事から、大学生を対象にして、レジリエンスの高低により自立性・依存性・対人関係・家族関係・将来の展望等を比較検討したので報告する。

対象と方法

対象は都内の四年制大学の学生233名で、回答に不備のあった14名 (6%) を削除し、219名を対象とした。方法はレジリエンス尺度、自立性-依存性尺度、SCT、バウムテストを用いた。

- 1) レジリエンス尺度：祐宗 (2007) の検査を参考に作成した質問紙で、「物事に積極的に取り組んでいますか。」といった10項目の質問に「全くそうである」から「全くそうでない」までの5件法で回答をする。
- 2) 自立性-依存性尺度：記虎 (2006) により作成された質問紙で、「大きなことでも、自分で決断できる。」といった20項目の質問から構成されていて、これに「全くあてはまらない」から「大変当てはまる」までの5件法で回答をする。
- 3) SCT：13項目の短文や単語に、自由に文章を付け加えて貰った。
- 4) バウムテスト：A4の用紙に「1本の実なる木を根っこまで書いて下さい。」と教示した。集団方式で2009年10月に実施した。

結果と考察

まず、レジリエンス尺度の全体の平均 = 33.31 ± 6.10 であり、平均 + 1SD を高群 (男子21名・女子 = 9名；平均年齢 = $20.1 \pm .96$) とし、平均 - 1SD を低群 (男子 = 17名・女子 = 11名；平均年齢 = 19.9 ± 1.05) に群分けした。この2群間で検査結果の検討を試みた。

1) 自立性－依存性尺度の結果

高・低群の自立性－依存性のt検定の結果を表1に示す。高群は低群よりも自立性が高く有意差 ($p<.01$) が認められた。さらに、依存性は低群よりも高群は低く有意差 ($p<.01$) が認められた。ところで、レジリエンスとは「弾力・反発力・不幸や変化からの回復力」とされていることから、高群は低群よりも自立性が高いことが窺われる。

表1 自立性－依存性のt検定の結果

		平均	SD	有意差
自立性	高群	39.1	4.6	
	低群	27.8	4.85	**
依存性	高群	31.39	6.66	
	低群	39.25	6.43	**

** $p<.01$

2) SCTの結果

高・低群間で χ^2 検定を用いて比較検討した結果、6項目 (50.0%) に有意差、1項目 (8.3%) に有意傾向が認められた。結果を表2に示す。

以下、内容を検討する。

- (1) 子供の頃：「元気・遊ぶ」は高群70%・低群36%、「おとなしい」は高群20%・低群54%で有意差が認められた ($\chi^2(2) = 7.82, p < .05$)。高群は外向型、低群は内向型と解釈される。
- (2) 父親：「尊敬・優しい」は2群とも50%、「厳格・嫌い」は高群24%・低群33%で有意差が認められなかった。両群とも父親との関係は、ほぼ良いようである。
- (3) 母親：「尊敬・優しい」は高群50%・低群40%で父親と同様に関係は良い。しかし、「過干渉・嫌い」は高群11%・低群30%であった事から、高群よりも、低群は両親との関係が悪い。
- (4) 親から納得出来ないことを言われたとき：「反抗・怒る」は高群40%・低群43%、「黙る・無視する」は高群17%・低群50%、「話し合う」は高群27%・低群4%で有意差が認められた ($\chi^2(3) = 12.87, p < .01$)。親から理不尽なことを言われた時には、両群とも40%は反発する。高群はコミュニケーションにより解決する。これらの結果は、パーソナリティにも関係しているだろう。
- (5) 将来：「不安・分からない」は高群17%・低群43%、「自分を生きる」は高群27%・低群8%、「家庭を持つ」は高群7%・低群22%で有意差が認められた ($\chi^2(4) = 14.53, p < .01$)。高群は将来に対して積極的であるが、低群は不安が強く消極的である。
- (6) 仕事：「する」は高群67%・低群43%、「したくない」は高群7%・低群43%で有意差が認められた ($\chi^2(4) = 11.22, p < .05$)。高群は働くことに肯定的であるのに対して、低群は肯定と否定が半々になっている。働くことに自信がないようである。
- (7) 友達：「大切」は高群80%・低群65%、「小数・少ない」は高群10%・低群29%で低群に

表2 SCTの χ^2 検定の結果

		高群		低群		有意差
		N	%	N	%	
子どもの頃	元気・遊ぶ	21	70	10	36	
	おとなしい	6	20	15	54	
	その他	3	10	3	11	*
父親	尊敬・優しい	15	50	14	50	
	厳格・嫌い	7	24	9	33	
	自由・楽しい	4	14	3	11	
母親	尊敬・優しい	5	50	11	40	
	過干渉・嫌い	3	11	8	30	
	普通	1	4	3	11	
	その他	5	17	4	15	
親が納得 出来ない	反抗・怒る	12	40	12	43	
	話し合う	11	37	1	4	
	黙る・無視	5	17	14	50	
	その他	2	7	1	4	**
将来	自分を生きる	8	27	2	8	
	先生・公務員	8	27	3	11	
	不安・分からない	5	17	12	43	
	明るい・楽しい	4	14	0	0	
	家庭を持つ	2	7	6	22	**
仕事	する	20	67	12	43	
	したくない	2	7	12	43	
	責任・信頼	4	14	1	4	
	適当に	2	7	1	4	
	その他	2	7	2	8	*
友達	大切	24	80	18	65	
	小数・居ない	3	10	8	29	
	普通	2	7	2	8	
	その他	1	4	0	0	
恋愛	好き	14	47	7	25	
	しない	7	24	17	61	
	難しい	4	14	2	8	
	偶然と必然	3	10	0	0	
	その他	2	7	2	8	*
心引かれる物	真面目な人	16	54	7	25	
	良いもの	6	20	13	47	
	可愛いもの	4	14	1	4	
	食べ物	1	4	1	4	
	スポーツ	2	7	2	8	
	その他	1	4	4	15	†
服	おしゃれ	13	44	5	18	
	地味	3	10	12	43	
	適当	10	34	10	36	
	その他	4	14	12	43	**
忘れられない	思い出	14	47	11	40	
	失敗・不安	6	20	9	33	
	スポーツ	4	14	2	8	
	彼女	3	10	0	0	
	その他	3	10	6	22	
金	大切	21	70	22	79	
	ない	3	10	5	18	
	金より大切	1	4	0	0	
	幸せも不幸も	5	17	1	4	

* $p < .05$ ** $p < .01$

は、対人関係が希薄な人が含まれている。

- (8) 恋愛：「好き」は高群47%・低群25%、「しない」は高群24%・低群61%で有意差が認められた ($\chi^2(4)=10.11, p<.05$)。高群は肯定的であるが、低群は恋愛に対して否定的である。これは対人関係が希薄であることや傷つきたくないことが関係するようである。
- (9) 心惹かれる物は：「真面目な人」は高群54%・低群25%、「良いもの」は高群20%・低群36%で有意傾向が認められた ($\chi^2(5)=9.64, p<.10$)。高群は人に関心があるのに対して、低群は人よりも物に興味がある。
- (10) 服：「おしゃれ」は高群44%・低群18%、「地味」は高群10%・低群43%で有意差が認められた ($\chi^2(3)=11.99, p<.01$)。服は自分を表現することでもあり、高群は自分をおしゃれであると自信を持っている。低群は地味であり、むしろ目立たないようにしている。内向型の性格が、関係しているようである。
- (11) 忘れられない：「思い出」は高群47%・低群46%、「失敗・不安」は高群20%・低群33%で、低群は挫折体験を忘れないようである。
- (12) 金：「大切」は両群ともに70%代を占めている。「ない」は高群10%・低群18%、「幸せも不幸も」は高群17%・低群4%で高群はお金の価値を知っているようである。

小括

高群の性格は外向的で、両親との関係も親和的で、葛藤が生じた時にはコミュニケーションにより解決している。友人も多く、恋愛・服装にも関心を払い、仕事や将来に対しても肯定的である。一方、低群の性格は内向的で、両親との関係も嫌悪感を有し、葛藤が生じた時には回避する。将来・仕事・恋愛に対して不安が強く消極的である。友人や服装に対しても関心が低い。さらに、挫折体験を何時までも引きずる傾向がある。これらの特徴は、レジリエンスの高低にも関係すると考察される。

3) バウムテストの結果

高・低群間で χ^2 検定を用いて比較検討した結果を表3に示す。

表3 バウムテストの χ^2 検定の結果

		高群		低群		有意差
		N	%	N	%	
サイズ	20cm以下	10	34	18	65	
	20.1cm以上	20	67	10	36	*
幹の太さ	4cm以下	19	63	24	85	
	4.1cm以上	11	37	4	15	†
幹の開放	あり	10	34	13	47	
	なし	20	67	15	53	
枝	上に伸びる	18	60	11	40	
付加物	あり	5	17	20	72	
	なし	25	83	8	28	**
幹の傷	あり	0	0	3	11	
	なし	30	100	25	89	†
幹の膨らみ	あり	6	20	8	28	
	なし	24	80	20	72	
黒い実	あり	3	10	6	22	
	なし	27	90	22	78	
根	あり	29	96	24	85	
	なし	1	4	4	15	
地平	あり	24	80	20	72	
	なし	16	20	8	28	

* $p<.05$ ** $p<.01$

- (1) サイズ：「20.1cm以上」は高群67%・低群36%で、有意差が認められた ($\chi^2(1) = 5.56, p < .05$)。高群はエネルギーがある (図1)。
- (2) 幹の太さ：「4.1cm以上」は高群37%・低群15%で、有意傾向が認められた ($\chi^2(1) = 3.78, p < .10$)。高群は幹が太いことから自我の強さが窺われる。
- (3) 幹の開放：高群34%・低群47%、低群は自我が未発達・硬い・空虚感が認められる。
- (4) 枝：「上に伸びる」は高群60%・低群40%で、有意差が認められなかった。高群は上昇志向が窺われる。これはサイズが多きことも関係するようである。
- (5) 幹の傷：「あり」は高群0%・低群11%で、有意差が認められた ($\chi^2(1) = 3.39, p < .10$)。少数であるが、低群にトラウマが存在するようである (図2)。
- (6) 幹の膨らみ：「あり」は高群20%・低群29%で、有意差が認められなかった。
- (7) 黒い実：高群10%・低群22%から、低群に挫折体験を有するようである。
- (8) 付加物あり：高群17%・低群72%で、有意差が認められた ($\chi^2(1) = 17.71, p < .01$)。高群は指示通りに書いているのに対して、低群は木以外に花や動物などを追加しており、木をカモフラージュし幼稚性の表現と解釈される。
- (9) 根：「なし」は高群4%・低群15%で、有意差が認められなかった。
- (10) 地平：「なし」は高群20%・低群28%で有意差が認められなかった。少数であるが、低群に母子関係の希薄さが認められる。

要約

高群はエネルギーを有し、上昇志向があり、指示に従うのに対して、低群は自我が未発達で、トラウマを有し母子関係は希薄傾向が認められた。

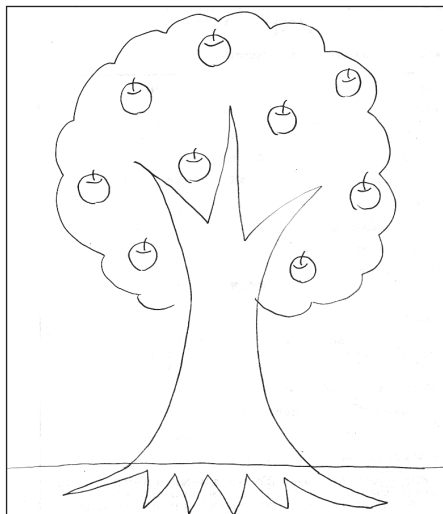


図1 高群 女子20歳



図2 低群 女子22歳

総合考察

大学生を対象にレジリエンスの高群と低群に分け、心理テストのバッテリーを組んで実施し、両群のテスト結果の比較を試みた。高群は自立性が高く、自己肯定感が強く、両親や友達関係も親和的で、将来や仕事に対しても肯定的である(橋本, 2002: 2006: 2007)。

これに対し、低群は依存性が高く、親との関係に確執があり、友達関係も希薄で、将来に対しても不安があり、少数であるが挫折体験・トラウマの存在も窺われた。これからフリーター・引きこもりの可能性もあることから、大学生の間に心理的支援が必要と考察される(橋本, 2009)。

謝辞

いつも協力をして下さいました、桜美林大学の木村亜弥子院生・ゼミ生の一條祐樹さんたちに、「ありがとう」と感謝致します。

参考・引用文献

馬場謙一編(1987). 青年期の深層 有斐閣

橋本泰子(2002). 心理学的アセスメントによるアパシー傾向の一考察 文教大学人間科学研究第24号, p59～p62.

橋本泰子(2002). 学生の“社会的ひきこもり”傾向の研究－SCT・TEG・SWT・WZT－ 文教大学 臨床相談研究所紀要 第6号, p22－p37.

橋本泰子(2006). スチューデント・アパシー傾向の一考察 桜美林論集第33号, p97－p99.

橋本泰子・清水美帆(2007). 大学生におけるニート傾向の心理特性の研究 桜美林国際学論集 第12号, p185－p188.

記虎味央(2006). 大学生・高校生の依存性と自立性の研究 桜美林大学国際研究科 臨床心理学専修 修士論文

町沢静夫(2001). 自分を消したいこの国の子供たち PHP

中園正身(2005). 樹木心理学の提唱と樹木画法への適応 北樹出版

斎藤環(1998). 社会的引きこもり終わらない思春期 PHP新書

祐宗省三(2007). S-H式レジリエンス検査手引き p3 竹井機器工業株式会社